

(19) 日本国特許庁 (JP)

(12) 特 許 公 報 (B2)

(11) 特許番号

特許第6701242号
(P6701242)

(45) 発行日 令和2年5月27日 (2020.5.27)

(24) 登録日 令和2年5月8日 (2020.5.8)

(51) Int.Cl.	F 1
F 1 6 F 9/348 (2006.01)	F 1 6 F 9/348
F 1 6 F 9/46 (2006.01)	F 1 6 F 9/46
F 1 6 F 9/32 (2006.01)	F 1 6 F 9/32 L

請求項の数 10 (全 24 頁)

(21) 出願番号	特願2018-28777 (P2018-28777)	(73) 特許権者	000000929
(22) 出願日	平成30年2月21日 (2018.2.21)		K Y B株式会社
(65) 公開番号	特開2019-143729 (P2019-143729A)		東京都港区浜松町2丁目4番1号 世界貿易センタービル
(43) 公開日	令和1年8月29日 (2019.8.29)	(74) 代理人	100122323
審査請求日	令和2年1月31日 (2020.1.31)		弁理士 石川 憲
早期審査対象出願		(74) 代理人	100067367
			弁理士 天野 泉
		(72) 発明者	小林 義史
			東京都港区浜松町2丁目4番1号 世界貿易センタービル K Y B株式会社内
		(72) 発明者	安部 友泰
			東京都港区浜松町2丁目4番1号 世界貿易センタービル K Y B株式会社内

最終頁に続く

(54) 【発明の名称】 バルブおよび緩衝器

(57) 【特許請求の範囲】

【請求項 1】

ポートと、ポートの出口端に連通される環状窓と、前記環状窓の内周側に設けられた内周弁座と、前記環状窓の外周側に設けられた外周弁座とを有する弁座部材と、

環板状であって弁座部材に積まれるとともに前記外周弁座に離着座して前記環状窓を開閉可能であって前記環状窓に臨んで絞り或いは絞りに通じる通路となる孔を有する第一弁体と、

環板状であって前記弁座部材の内周弁座と前記第一弁体との間に介装されて前記孔を開閉可能な第二弁体と、

前記第一弁体を前記第二弁体側へ向けて付勢する付勢部材とを備え、

前記弁座部材の軸方向に直交する方向から見て前記第二弁体の反弁座部材側面を前記弁座部材の前記外周弁座よりも高く、

前記第一弁体は、前記付勢部材の付勢力を受けて前記外周弁座に着座することを特徴とするバルブ。

【請求項 2】

前記付勢部材は、

前記第一弁体の反弁座部材側に配置される弾性を有する環状板と、

環板状であって前記第一弁体と前記環状板との間に介装され、内径が前記第一弁体と前記環状板の内径よりも大径であるとともに前記第一弁体と前記環状板の外径よりも小径なリングとを有する

ことを特徴とする請求項 1 に記載のバルブ。

【請求項 3】

前記付勢部材は、前記第一弁体を反弁座部材側から付勢する弾性体であることを特徴とする請求項 1 に記載のバルブ。

【請求項 4】

環板状であって前記第一弁体の反弁座部材側に重ねられて前記孔に通じる前記絞りを有する絞り弁体を備えた

ことを特徴とする請求項 1 から 3 のいずれか一項に記載のバルブ。

【請求項 5】

前記第一弁体の外周或いは前記弁座部材の前記外周弁座に固定オリフィスが設けられている

ことを特徴とする請求項 1 から 4 のいずれか一項に記載のバルブ。

【請求項 6】

前記付勢部材は、前記第一弁体とともに前記第二弁体を前記弁座部材側に撓ませて前記第一弁体を前記外周弁座へ着座させる

ことを特徴とする請求項 1 から 5 に記載のバルブ。

【請求項 7】

シリンダと、

シリンダ内に移動自在に挿入されるとともに前記シリンダ内を伸側室と圧側室とに区画するピストンと、

前記シリンダ内に挿入されて前記ピストンに連結されるピストンロッドと、

前記シリンダの外周側に配置されて内方にリザーバ室が形成される外筒と、

前記シリンダの端部に設けられて前記圧側室と前記リザーバ室とを仕切るバルブケースと、

前記ピストンの前記伸側室側に設けられて前記ピストンに設けられる圧側ポートを開閉するピストン側バルブと、

前記バルブケースの前記圧側室側に設けられて前記バルブケースに設けられる吸込ポートを開閉するケース側バルブと、

請求項 1 から 6 のいずれか一項に記載のバルブとを備え、

前記弁座部材がピストンとされ、前記第一弁体が前記ピストンの前記圧側室側に配置される

ことを特徴とする緩衝器。

【請求項 8】

シリンダと、

シリンダ内に移動自在に挿入されるとともに前記シリンダ内を伸側室と圧側室とに区画するピストンと、

前記シリンダ内に挿入されて前記ピストンに連結されるピストンロッドと、

前記シリンダの外周側に配置されて内方にリザーバ室が形成される外筒と、

前記シリンダの端部に設けられて前記圧側室と前記リザーバ室とを仕切るバルブケースと、

前記ピストンの前記伸側室側に設けられて前記ピストンに設けられる圧側ポートを開閉するピストン側バルブと、

前記バルブケースの前記圧側室側に設けられて前記バルブケースに設けられる吸込ポートを開閉するケース側バルブと、

請求項 1 から 6 のいずれか一項に記載のバルブとを備え、

前記弁座部材がバルブケースとされ、前記第一弁体が前記バルブケースの前記リザーバ室側に配置される

ことを特徴とする緩衝器。

【請求項 9】

シリンダと、

10

20

30

40

50

シリンダ内に移動自在に挿入されるとともに前記シリンダ内を伸側室と圧側室とに区画するピストンと、

前記シリンダ内に挿入されて前記ピストンに連結されるピストンロッドと、

前記シリンダの外周側に配置されて内方にリザーバ室が形成される外筒と、

前記シリンダの端部に設けられて前記圧側室と前記リザーバ室とを仕切るバルブケースと、

前記ピストンの前記伸側室側に設けられて前記ピストンに設けられる圧側ポートを開閉するピストン側バルブと、

前記バルブケースの前記圧側室側に設けられて前記バルブケースに設けられる吸込ポートを開閉するケース側バルブと、

請求項 1 から 6 のいずれか一項に記載のバルブとを備え、

前記弁座部材がピストンとされて前記第一弁体が前記ピストンの前記圧側室側に配置されるとともに、前記弁座部材がバルブケースとされて前記第一弁体が前記バルブケースの前記リザーバ室側に配置されている

ことを特徴とする緩衝器。

【請求項 10】

前記伸側室と前記リザーバ室とを連通する減衰通路と、

前記減衰通路に設けられて前記伸側室から前記リザーバ室へ向かう流体の流れに抵抗を与える可変減衰バルブとを備えた

ことを特徴とする請求項 7 から 9 のいずれか一項に記載の緩衝器。

【発明の詳細な説明】

【技術分野】

【0001】

本発明は、バルブおよび緩衝器に関する。

【背景技術】

【0002】

従来、バルブにあっては、たとえば、車両のサスペンションに利用される緩衝器のピストン部等に用いられ、緩衝器内に区画される作動室同士を連通するポートを備えた弁座部材と、弁座部材に積層されてポートを開閉するメインディスクとを備えたものが知られる。

【0003】

このようなバルブは、メインディスクの内周を固定支持してメインディスクの外周側の撓みを許容している。そして、メインディスクは、ポートの上流の圧力が開弁圧に達すると撓み、弁座部材のポートの外周に設けられた環状弁座から離座してポートを開放する。

【0004】

また、バルブは、メインディスクに穿ったオリフィス孔を備えており、緩衝器が伸縮する際の速度（ピストン速度）が極低速域にある場合には、メインディスクのポートの開放に先立ちオリフィス孔を通じて作動油の通過を許容する。よって、このようなバルブを備えた緩衝器では、ピストン速度に応じて車両の乗心地に適する減衰力を発揮できる。

【0005】

ここで、オリフィス孔が常時作動室同士を連通していると、緩衝器が伸長しても収縮しても作動油が同じオリフィス孔を通過するため、緩衝器の伸側の減衰力特性（ピストン速度に対する減衰力の特性）と圧側の減衰力特性を独立して設定し難くなる。

【0006】

そこで、メインディスクと弁座部材との間に、外径がメインディスクよりも小径の環状のサブディスクを介装して、サブディスクでオリフィス孔を開閉するバルブが開発されている（たとえば、特許文献 1 参照）。

【0007】

このバルブでは、サブディスクの内周がリーフバルブとともに固定支持されておりサブディスクの外周側の撓みが許容されている。そして、サブディスクは、外径がリーフバル

10

20

30

40

50

ブの外径よりも小さいために環状弁座には着座せずに、リーフバルブの弁座部材側の面に離着してオリフィス孔を開閉する。

【先行技術文献】

【特許文献】

【0008】

【特許文献1】特開2015-86966号公報(図2)

【発明の概要】

【発明が解決しようとする課題】

【0009】

前記バルブでは、メインディスクに開弁圧を設定するために、メインディスクの内周側と環状弁座に着座する外周側で横方向から見て高低差が設けられていて初期撓みを与えられた状態で着座している。

【0010】

これに対して、サブディスクは、何ら荷重が作用しない状態でメインディスクと弁座部材との間に介装されていて、弁座部材側に向けて凸となるように撓んだメインディスクの弁座部材側面に対面している。よって、流体力や圧力と言った負荷が作用しない無負荷状態では、サブディスクとリーフバルブとの間に隙間が生じてしまう。そのため、サブディスクをリーフバルブに密着させるように撓ませるだけの流体力や圧力が作用するまでは、オリフィス孔は開きっぱなしとなってしまう。

【0011】

このように、従来のバルブでは、無負荷状態においてサブディスクがオリフィス孔を完全に閉鎖できない。よって、このバルブを備えた緩衝器が低速度で伸縮する場合、オリフィス孔の通過作動油量が少ないのでオリフィス孔を完全に閉鎖されず、緩衝器が伸長しても収縮しても作動油がオリフィス孔を通過してしまう。

【0012】

また、緩衝器の伸縮速度が高くなるとサブディスクが撓んでメインディスクに密着してオリフィス孔を閉鎖するので、サブディスクのオリフィス孔の開閉の前後で減衰力特性が変化してしまう。

【0013】

そこで、本発明は、無負荷状態でも絞りを確実に閉鎖できるバルブおよびこのバルブを利用した緩衝器の提供を目的とする。

【課題を解決するための手段】

【0014】

上記の目的を達成するため、本発明のバルブは、ポートと、ポートの出口端に連通される環状窓と、環状窓の内周側に設けられた内周弁座と、環状窓の外周側に設けられた外周弁座とを有する弁座部材と、環板状であって弁座部材に積まれるとともに外周弁座に離着座して環状窓を開閉可能であって環状窓に臨んで絞り或いは絞りに通じる通路となる孔を有する第一弁体と、環板状であって弁座部材の内周弁座と第一弁体との間に介装されて孔を開閉可能な第二弁体と、第一弁体を第二弁体側へ向けて付勢する付勢部材とを備え、弁座部材の軸方向に直交する方向から見て第二弁体の反弁座部材側面を弁座部材の外周弁座よりも高く、第一弁体は付勢部材の付勢力を受けて外周弁座に着座する。このように構成されたバルブでは、無負荷状態で第二弁体が第一弁体に密着して孔を閉塞できる。

【0015】

さらに、バルブにおける付勢部材は、第一弁体の反弁座部材側に配置される弾性を有する環状板と、環板状であって第一弁体と環状板との間に介装され内径が第一弁体と環状板の内径よりも大径であるとともに第一弁体と環状板の外径よりも小径なリングとを有してもよい。このように構成されたバルブは、付勢部材の構造が簡素で軸方向長さも短くて済むので、緩衝器に適用しても緩衝器のストローク長を損なわないので、緩衝器の全長の長尺化も回避できる。なお、付勢部材は、弾性体で構成されてもよい。

【0016】

10

20

30

40

50

また、バルブは、環板状であって第一弁体の反弁座部材側に重ねられて孔に通じる絞りを有する絞り弁体を備えていてもよい。このように構成されたバルブによれば、組立作業が容易となり、常に一定の開口面積の絞りで減衰力発揮できる。

【0017】

さらに、本実施の形態のバルブは、固定オリフィスを備える場合、緩衝器の伸縮両側の減衰力特性を独立に設定可能である。また、付勢部材は、第一弁体とともに第二弁体を弁座部材側に撓ませて第一弁体を前記外周弁座へ着座させてもよい。

【0018】

また、本発明の緩衝器は、シリンダと、シリンダ内に移動自在に挿入されるとともにシリンダ内を伸側室と圧側室とに区画するピストンと、シリンダ内に挿入されてピストンに連結されるピストンロッドと、シリンダを覆ってシリンダとの間にリザーバ室を形成する外筒と、シリンダの端部に設けられて圧側室とリザーバ室とを仕切るバルブケースと、ピストンの伸側室側に設けられてピストンに設けられる圧側ポートを開閉するピストン側バルブと、バルブケースの圧側室側に設けられてバルブケースに設けられる吸込ポートを開閉するケース側バルブとを備え、ピストンの圧側室側に配置されるバルブとバルブケースのリザーバ室側に配置されるバルブの一方または両方を備える。

【0019】

このように構成された緩衝器では、無負荷状態でも絞りを確実に閉鎖でき、異音の発生が抑制されるとともに、車両のサスペンションに利用すると車両における乗り心地を向上できる。

【0020】

さらに、緩衝器は、シリンダと、シリンダ内に移動自在に挿入されるとともにシリンダ内を伸側室と圧側室とに区画するピストンと、シリンダ内に挿入されてピストンに連結されるピストンロッドと、シリンダの外周に配置されて内方にリザーバ室が形成される外筒と、シリンダの端部に設けられて圧側室とリザーバ室とを仕切るバルブケースと、ピストンの伸側室側に設けられてピストンに設けられる圧側ポートを開閉するピストン側バルブと、バルブケースの圧側室側に設けられてバルブケースに設けられる吸込ポートを開閉するケース側バルブと、伸側室とリザーバ室とを連通する減衰通路と、減衰通路に設けられて伸側室からリザーバ室へ向かう流体の流れに抵抗を与える可変減衰バルブとを備え、ピストンの圧側室側に配置されるバルブとバルブケースのリザーバ室側に配置されるバルブの一方または両方を備える。

【0021】

このように構成された緩衝器では、無負荷状態でも絞りを確実に閉鎖でき、減衰力可変幅を大きくしつつも異音の発生を抑制でき、車両のサスペンションに利用すると車両における乗り心地を向上できる。

【発明の効果】

【0022】

本発明のバルブおよび緩衝器によれば、無負荷状態でも絞りを確実に閉鎖できる。

【図面の簡単な説明】

【0023】

【図1】一実施の形態における緩衝器の断面図である。

【図2】一実施の形態のバルブが適用されたピストンの拡大断面図である。

【図3】一実施の形態のバルブにおける弁座部材を除いた構成部品の平面図である。

【図4】一実施の形態のバルブが適用されたバルブケースの拡大断面図である。

【図5】一実施の形態における緩衝器の減衰力特性を示した図である。

【図6】一実施の形態の第一変形例がバルブが適用されたピストンの拡大断面図である。

【図7】一実施の形態の第二変形例における緩衝器の断面図である。

【図8】一実施の形態の第二変形例における緩衝器の減衰力特性を示した図である。

【発明を実施するための形態】

【0024】

以下、本発明のバルブおよび緩衝器を図に基づいて説明する。一実施の形態におけるバルブV 1, V 2は、図1に示すように、緩衝器Dのピストン部の伸側減衰バルブおよびベースバルブ部の圧側減衰バルブとして利用されている。

【0025】

以下、バルブV 1, V 2および緩衝器Dの各部について詳細に説明する。緩衝器Dは、シリンダ1と、シリンダ1内に移動自在に挿入されるとともにシリンダ1内を伸側室R 1と圧側室R 2とに区画するピストン2と、シリンダ1内に挿入されてピストン2に連結されるピストンロッド3と、シリンダ1を覆ってシリンダ1との間にリザーバ室Rを形成する外筒4と、シリンダ1の端部に設けられて圧側室R 2とリザーバ室Rとを仕切るバルブケース5と、ピストン2の伸側室側に設けられてピストン2に設けられる圧側ポート2 bを開閉するピストン側バルブ6と、バルブケース5の圧側室側に設けられてバルブケース5に設けられる吸込ポート5 eを開閉するケース側バルブ20と、バルブとしてピストン部におけるバルブV 1とベースバルブ部におけるバルブV 2を備えている。

10

【0026】

シリンダ1は、筒状であって内部には、前述したようにピストン2が移動自在に挿入されており、ピストン2の図1中上方に伸側室R 1が、図1中下方には圧側室R 2がそれぞれ区画されている。伸側室R 1と圧側室R 2内には、流体として、具体的にはたとえば、作動油が充填されている。なお、流体としては、作動油のほかの液体やMR流体、ER流体、水、水溶液等を充填してもよい。

【0027】

20

また、シリンダ1は、外周側に配置される有底筒状の外筒4内に收容されており、シリンダ1と外筒4との間の環状隙間でリザーバ室Rが形成されている。このリザーバ室R内は、この場合、作動油と気体とが充填されており、流体を作動油とする場合、作動油の劣化を防止するため気体を窒素等といった不活性ガスとするとよい。

【0028】

そして、シリンダ1の図1中下端には、バルブケース5が嵌合されて設けられており、圧側室R 2とリザーバ室Rとが仕切られており、また、シリンダ1の図1中上端には、ピストンロッド3を摺動自在に軸支するロッドガイド8が嵌合されている。このロッドガイド8は、外筒4の内周に嵌合され、外筒4の上端を加締めることで、ロッドガイド8の図1中上方に積層されて外筒4、シリンダ1およびピストンロッド3のそれぞれの間をシールするシール部材9とともに外筒4に固定される。このようにロッドガイド8を外筒4に固定するとシリンダ1は、外筒4の底部に載置されたバルブケース5とロッドガイド8とで挟持され、シリンダ1もバルブケース5とともに外筒4内で固定される。なお、外筒4の上端開口端を加締める代わりに、上端開口部にキャップを螺着して、このキャップと外筒4の底部とで、前記シール部材9、ロッドガイド8、シリンダ1およびバルブケース5を挟持して、これら部材を外筒4内で固定してもよい。

30

【0029】

ピストン2は、環状であって図1および図2に示すように、バルブV 1における弁座部材とされていてピストンロッド3の一端となる図1中下端に固定されている。弁座部材としてのピストン2は、伸側室R 1と圧側室R 2とを連通するポートとしての伸側ポート2 aと、圧側室R 2と伸側室R 1とを連通する圧側ポート2 bを備えている。伸側ポート2 aは、ピストン2に複数設けられており、それぞれピストン2に対してピストン2の中心を中心とする同一円周上に配置されている。そして、ピストン2は、図2中下端である圧側室側端に伸側ポート2 aの出口端に連通される環状凹部でなる環状窓2 cを備えるとともに、同じく下端の環状窓2 cの内周側に環状の内周弁座2 dと環状窓2 cの外周側に環状の外周弁座2 eを備えている。なお、伸側ポート2 aおよび圧側ポート2 bのそれぞれの設置数は任意であり単数であってもよい。

40

【0030】

なお、図2に示すように、ピストン2を横方向（ピストン2の軸方向に直交する方向）から見て、ピストン2の下端に設けた内周弁座2 dと外周弁座2 eの高さを比べると、内

50

周弁座 2 d の方が外周弁座 2 e よりも高くなっている。図 2 に示したところでは、内周弁座 2 d の下端は、外周弁座 2 e の下端よりも図 2 中下方となる圧側室 R 2 側へ位置しており、両者には段差が付けられている。

【 0 0 3 1 】

また、圧側ポート 2 b は、ピストン 2 に対して同一円周上であって伸側ポート 2 a よりも外周側に複数設けられていて、入口端となる下端開口は外周弁座 2 e よりも外周側に開口している。また、ピストン 2 は、各圧側ポート 2 b の出口端となる上端開口をそれぞれ独立に取り囲む花弁型弁座 2 f を備えており、各圧側ポート 2 b の出口端は互いに連通されずに独立してピストン 2 の上端に開口している。そして、伸側ポート 2 a の入口端は、花弁型弁座 2 f における圧側ポート 2 b を囲む部分と隣の圧側ポート 2 b を囲む部分との間を介して伸側室 R 1 へ連通されている。

10

【 0 0 3 2 】

ピストン 2 の図 2 中上側である伸側室側には、環状板を複数枚積層して構成されたピストン側バルブ 6 が重ねられている。ピストン側バルブ 6 は、内周を固定端として外周側の撓みが許容されている。ピストン側バルブ 6 は、圧側室 R 2 の圧力が伸側室 R 1 の圧力より高くなり、圧側ポート 2 b を介して作用する圧側室 R 2 の圧力を受けて撓んで花弁型弁座 2 f から離座して開弁すると圧側ポート 2 b を開放して圧側室 R 2 と伸側室 R 1 とを連通させる。反対に、ピストン側バルブ 6 は、伸側室 R 1 の圧力が圧側室 R 2 の圧力より高いと背面側から作用する伸側室 R 1 によって押しつけられて花弁型弁座 2 f に密着し圧側ポート 2 b を閉塞して圧側室 R 2 と伸側室 R 1 との連通を遮断する。したがって、ピストン側バルブ 6 は、花弁型弁座 2 f に離着座して圧側ポート 2 b を開閉するチェックバルブとして機能する。

20

【 0 0 3 3 】

他方、ピストン 2 の図 2 中下側である圧側室側には、バルブ V 1 が設けられている。バルブ V 1 は、環板状であってピストン 2 に積まれるとともに外周弁座 2 e に離着座して環状窓 2 c を開閉可能であって環状窓 2 c に臨む孔 1 0 a を有する第一弁体 1 0 と、環板状であってピストン 2 の内周弁座 2 d と第一弁体 1 0 との間に介装されて孔 1 0 a を開閉可能な第二弁体 1 1 と、第一弁体 1 0 の反弁座部材側に重ねられて孔 1 0 a に通じる絞りとしてのオリフィス 1 2 a を有する絞り弁体としてのオリフィス弁体 1 2 と、第一弁体 1 0 を第二弁体 1 1 側へ向けて付勢する付勢部材 B 1 とを備えている。

30

【 0 0 3 4 】

第一弁体 1 0 は、前述の通り環板状であって、内周が固定端として外周側の撓みが許容され、外周弁座 2 e に離着座して伸側ポート 2 a を開閉するようになっており、バルブ V 1 の主弁体として機能している。また、本実施の形態では、図 3 に示すように、第一弁体 1 0 は、環状窓 2 c に対向する位置に周方向に沿って配置される複数の孔 1 0 a を備える他、外周に切欠で形成される複数の固定オリフィス 1 0 b を備えている。したがって、第一弁体 1 0 は、外周弁座 2 e に着座した状態では、固定オリフィス 1 0 b を介して伸側ポート 2 a と圧側室 R 2 とを連通させる。

【 0 0 3 5 】

そして、第一弁体 1 0 のピストン側には、第二弁体 1 1 が配置されている。第二弁体 1 1 は、図 3 に示すように、外径が外周弁座 2 e の内径よりも小径であって孔 1 0 a を開閉可能な径とされる環板状であって、内周弁座 2 d と第一弁体 1 0 との間に介装されている。また、第二弁体 1 1 は、内周が固定端として外周側の撓みが許容され、第一弁体 1 0 に離着して孔 1 0 a を開閉するようになっており、バルブ V 1 の副弁体として機能している。

40

【 0 0 3 6 】

また、本実施の形態の第一弁体 1 0 の反ピストン側には、オリフィス弁体 1 2 が設けられている。オリフィス弁体 1 2 は、外径が第一弁体 1 0 の外径と同径の環板状であって、内周が固定端とされて第一弁体 1 0 と共に外周の撓みが許容されている。また、オリフィス弁体 1 2 は、図 3 に示すように、同一円周上に配置される四つの円弧状孔 1 2 b と、外

50

周から開口してそれぞれ対応する円弧状孔 12 b に通じる四つのオリフィス 12 a とを備えている。

【0037】

なお、本実施の形態では、図 2 に示すように、第一弁体 10 とオリフィス弁体 12 との間には、外径が第一弁体 10 の外径と同径の環板状のディスク 13 が介装されている。ディスク 13 は、図 3 に示すように、内周が固定端とされて第一弁体 10 およびオリフィス弁体 12 と共に外周の撓みが許容されており、第一弁体 10 の孔 10 a とオリフィス弁体 12 の円弧状孔 12 b と対向する C 型の切欠 13 a を備えている。よって、孔 10 a とオリフィス 12 a は、切欠 13 a および円弧状孔 12 b を介して連通されており、孔 10 a はオリフィス 12 a に通じる通路として機能している。そして、第二弁体 11 が孔 10 a を開放すると伸側室 R1 と圧側室 R2 は、孔 10 a、切欠 13 a、円弧状孔 12 b およびオリフィス 12 a を通じて連通される。このように、ディスク 13 は、切欠 13 a を孔 10 a と円弧状孔 12 b とに対向させて両者を連通する役割を果たしており、第一弁体 10 とオリフィス弁体 12 の周方向相対的な位置によらず孔 10 a と円弧状孔 12 b の連通度合を大きくするために設けられている。第一弁体 10 の孔 10 a とオリフィス弁体 12 の円弧状孔 12 b との連通度合が或る程度確保できる場合、ディスク 13 は廃止してもよい。

10

【0038】

付勢部材 B1 は、図 2 に示すように、第一弁体 10 の反ピストン側に配置されており、オリフィス弁体 12 の反ピストン側に積層されている。具体的には、付勢部材 B1 は、第一弁体 10 の反ピストン側に配置される弾性を有する環状板 14 と、環状板であって第一弁体 10 と環状板 14 との間に介装されるリング 15 とを備えている。

20

【0039】

環状板 14 は、複数枚が積層されて設けられており、内周が固定端とされて外周側の撓みが許容されている。リング 15 は、内径が第一弁体 10 と環状板 14 の内径よりも大径であるとともに第一弁体 10 と環状板 14 の外径よりも小径とされており、本実施の形態では、図 3 に示すように、オリフィス弁体 12 の反ピストン側に積層される環板状のリング保持環 16 に取り付けられている。リング保持環 16 は、第一弁体 10 と同径とされ、内周が固定端とされて外周側の撓みが許容されており、リング 15 が外周に溶接或いは接着によって取り付けられている。また、リング保持環 16 の反ピストン側には外径がリング 15 よりも小径であって、リング 15 よりも薄肉の環状板でなるスペーサ 17 が介装されている。スペーサ 17 もまた内周が固定端とされて外周側の撓みが許容されている。

30

【0040】

さらに、付勢部材 B1 の環状板 14 の反ピストン側には、環状であって環状板 14 の外径よりも外径が小径の間座 18 が重ねられている。そして、ピストン側バルブ 6、ピストン 2、第二弁体 11、第一弁体 10、ディスク 13、オリフィス弁体 12、リング 15 が取り付けられたリング保持環 16、スペーサ 17、三枚の環状板 14 および間座 18 がピストンロッド 3 の下端に設けた小径部 3 a の外周に順番に組み付けられるとともに、小径部 3 a の先端に螺着されるピストンナット 19 によってピストンロッド 3 に固定される。ピストン側バルブ 6、第二弁体 11、第一弁体 10、ディスク 13、オリフィス弁体 12、リング保持環 16、スペーサ 17 および環状板 14 は、ピストンナット 19 の小径部 3 a への螺着によって固定されると、内周が固定されて外周の撓みが許容された状態でピストンロッド 3 に固定される。

40

【0041】

リング 15 とスペーサ 17 とでは横方向から見て高さが異なっているので、環状板 14 の外周が下方へ撓んでおり、環状板 14 に初期撓みが与えられている。このように初期撓みが与えられるので、環状板 14 は、第一弁体 10 をピストン側へ押しつける付勢力を発揮して第一弁体 10 を外周弁座 2 e へ着座させている。

【0042】

つまり、付勢部材 B1 は、本実施の形態では、環状板 14 の弾発力で第一弁体 10 を付

50

勢している。そして、付勢部材 B 1 は、この付勢力によって第一弁体 1 0 が伸側ポート 2 a を介して作用する伸側室 R 1 の圧力を受けて外周弁座 2 e から離座する際の伸側室 R 1 と圧側室 R 2 の差圧である開弁圧を設定している。開弁圧は、環状板 1 4 の設置枚数によって調節でき、本実施の形態では、三枚の環状板 1 4 を設けているが要求される開弁圧によって設置枚数は適宜変更できる。

【 0 0 4 3 】

そして、図 2 に示すように、ピストン 2 を横方向から見て、内周弁座 2 d の方が外周弁座 2 e よりも高くなっているため、付勢部材 B 1 からの付勢力を受けた第一弁体 1 0 は外周が図 2 中上方なる第二弁体 1 1 側へ撓んだ状態で外周弁座 2 e に着座する。このように第一弁体 1 0 が第二弁体 1 1 側へ撓むのに対して、第二弁体 1 1 も第一弁体 1 0 に倣って環状窓 2 c 側へ向けて撓むので、第二弁体 1 1 が第一弁体 1 0 のピストン側面に密着して孔 1 0 a を閉塞する。このように、バルブ V 1 をピストン 2 とともにピストンロッド 3 に固定した状態で何ら圧力も流体力も作用しない無負荷状態において、第二弁体 1 1 が第一弁体 1 0 のピストン側面に密着して孔 1 0 a を確実に閉塞する。なお、本実施の形態では、横方向から見て外周弁座 2 e より内周弁座 2 d を高くしているが、内周弁座 2 d が外周弁座 2 e に対して低くても、第二弁体 1 1 の反弁座部材側面となる図 2 中下面が弁座部材としてのピストン 2 の外周弁座 2 e よりも高くなっていけばよい。このようにすれば、第一弁体 1 0 の内周の固定位置は、外周弁座 2 e よりも高くなって、付勢部材 B 1 によって付勢されると図 2 中上方側となる外周弁座 2 e 側へ撓んで第二弁体 1 1 に密着する。なお、第二弁体 1 1 と内周弁座 2 d との間にスペーサを設けて、第二弁体 1 1 の反弁座部材側面となる図 2 中下面が弁座部材としてのピストン 2 の外周弁座 2 e よりも高くしてもよい。この場合も、第二弁体 1 1 は、第一弁体 1 0 が外周弁座 2 e に着座する状態では、第一弁体 1 0 とともに撓んで第一弁体 1 0 に密着して孔 1 0 a を閉塞できる。

【 0 0 4 4 】

このように構成されたバルブ V 1 は、伸側室 R 1 の圧力が圧側室 R 2 の圧力より高くなっても両者の差圧が前記開弁圧に達するまでは第一弁体 1 0 が外周弁座 2 e に着座した状態に維持される。この状態では固定オリフィス 1 0 b を通じて伸側室 R 1 と圧側室 R 2 とが連通されるので、伸側室 R 1 内の作動油は固定オリフィス 1 0 b のみを通して圧側室 R 2 へ移動する。また、第二弁体 1 1 は、無負荷状態でも第一弁体 1 0 に密着しており、伸側ポート 2 a を介して伸側室 R 1 の圧力を受けるので第一弁体 1 0 に密着したままとなりオリフィス 1 2 a に通じる孔 1 0 a を閉塞する。よって、オリフィス弁体 1 2 のオリフィス 1 2 a には、作動油は流れずオリフィス 1 2 a は機能しない。なお、ピストン側バルブ 6 或いは花弁型弁座 2 f にも固定オリフィスを設ける場合には、作動油は、この固定オリフィスとともに固定オリフィス 1 0 b を通過して伸側室 R 1 から圧側室 R 2 へ移動する。

【 0 0 4 5 】

そして、バルブ V 1 は、伸側室 R 1 の圧力が圧側室 R 2 の圧力より高くなって両者の差圧が前記開弁圧に達すると、第一弁体 1 0 を押す力が環状板 1 4 の付勢力に打ち勝って第一弁体 1 0 が撓んで外周弁座 2 e から離座し開弁する。バルブ V 1 が開弁すると伸側ポート 2 a が開放され、作動油は、第一弁体 1 0 と外周弁座 2 e との間にできる環状隙間を介して伸側室 R 1 から圧側室 R 2 へ移動するようになる。なお、第二弁体 1 1 は、第一弁体 1 0 とともに伸側室 R 1 の圧力を受けて撓むので第一弁体 1 0 のピストン側面に密着した状態となり孔 1 0 a を閉塞してオリフィス 1 2 a を機能させない。

【 0 0 4 6 】

また、バルブ V 1 は、圧側室 R 2 の圧力が伸側室 R 1 の圧力より高いと背面側から作用する圧側室 R 2 によって押しつけられて第一弁体 1 0 が外周弁座 2 e に密着し伸側ポート 2 a を閉塞する。また、オリフィス 1 2 a、円弧状孔 1 2 b、切欠 1 3 a および孔 1 0 a を介して圧側室 R 2 の圧力が第二弁体 1 1 に作用して第二弁体 1 1 が環状窓 2 c 側へ撓んで第一弁体 1 0 から離間して孔 1 0 a を開放する。よって、圧側室 R 2 の圧力が伸側室 R 1 の圧力より高くなると、前述の固定オリフィス 1 0 b を介して圧側室 R 2 と伸側室 R 1

とが連通されるほか、第二弁体 11 が孔 10 a を開放してオリフィス 12 a を介しても圧側室 R2 と伸側室 R1 とが連通される。

【0047】

このようにバルブ V1 では、伸側室 R1 の圧力が圧側室 R2 の圧力よりも高いがその差圧が小さい場合には、作動油に固定オリフィス 10 b を通過させ、圧側室 R2 の圧力が伸側室 R1 の圧力よりも高いがその差圧が小さいと作動油に固定オリフィス 10 b およびオリフィス 12 a を通過させる。そして、このように構成されたバルブ V1 では、無負荷状態で第二弁体 11 が第一弁体 10 に密着して孔 10 a を確実に閉塞できるので伸側室 R1 から圧側室 R2 へ作動油が向かう作動時において減衰特性が変化する不具合も解消され、オリフィス 12 a を確実に片効きのオリフィスとして機能させ得る。

10

【0048】

なお、第一弁体 10 における孔 10 a をオリフィスとして機能させてもよく、その場合には、オリフィス弁体 12 の代わりに、オリフィス弁体 12 と同様の円弧状孔と外周から開口して円弧状孔に連通する切欠とを備えた環板状のディスクを設けて、オリフィス弁体 12 を廃止してもよい。また、弁座部材としてのピストン 2 の形状および構造は、前述したところに限定されるものではなく、適宜設計変更することができる。

【0049】

バルブケース 5 は、図 1 および図 4 に示すように、環状であって、シリンダ 1 の下端に嵌合する小径な小径部 5 a と、下端外周に設けた筒状のスカーツ 5 b と、スカーツ 5 b に設けられてスカーツ 5 b の内外を連通する切欠 5 c と、圧側室 R2 に臨む図 1 中上端となる圧側室端からスカーツ 5 b 内に臨む反圧側室端へと通じるポートとしての減衰ポート 5 d および吸込ポート 5 e とを備えて構成されている。

20

【0050】

なお、この実施の形態の場合、減衰ポート 5 d は、バルブケース 5 に同一円周上に複数設けられており、吸込ポート 5 e についても同様にバルブケース 5 に減衰ポート 5 d が設けられる円より大径な円の円周上に複数設けられているが、これらポートのそれぞれの設置数は任意であり単数であってもよい。

【0051】

そして、バルブケース 5 は、シリンダ 1 の端部に小径部 5 a を嵌合してスカーツ 5 b の下端を外筒 4 の底部に当接させて、外筒 4 とシリンダ 1 とで挟持されて外筒 4 に固定されるとともに、このバルブケース 5 で、圧側室 R2 とリザーバ室 R とを仕切っている。また、減衰ポート 5 d および吸込ポート 5 e は、上端開口端がともに圧側室 R2 に臨んでおり、また、下端開口端がスカーツ 5 b に設けた切欠 5 c を介してリザーバ室 R に通じており、これら減衰ポート 5 d および吸込ポート 5 e は、圧側室 R2 とリザーバ室 R とを連通している。

30

【0052】

バルブケース 5 は、バルブ V2 における弁座部材とされていて、バルブ V2 およびケース側バルブ 20 とがバルブケース 5 の内周に挿入されるガイドロッド 21 の外周に固定されている。

【0053】

また、弁座部材としてのバルブケース 5 は、図 4 中下端であるリザーバ室側端にポートとしての減衰ポート 5 d の出口端に連通される環状凹部でなる環状窓 5 f を備えるとともに、同じく下端の環状窓 5 f の内周側に環状の内周弁座 5 g と環状窓 5 f の外周側に環状の外周弁座 5 h を備えている。

40

【0054】

なお、図 4 に示すように、バルブケース 5 を横方向（バルブケース 5 の軸方向に直交する方向）から見て、バルブケース 5 の下端に設けた内周弁座 5 g と外周弁座 5 h の高さを比べると、内周弁座 5 g の方が外周弁座 5 h よりも高くなっている。図 4 に示したところでは、内周弁座 5 g の下端は、外周弁座 5 h の下端よりも図 4 中下方となるリザーバ室 R 側へ位置しており、両者には段差が付けられている。

50

【 0 0 5 5 】

また、バルブケース 5 は、各吸込ポート 5 e の出口端となる上端開口をそれぞれ独立に取り囲む花卉型弁座 5 i を備えており、各吸込ポート 5 e の出口端は互いに連通されずに独立してバルブケース 5 の上端に開口している。そして、減衰ポート 5 d の入口端は、花卉型弁座 5 i における吸込ポート 5 e を囲む部分と隣の吸込ポート 5 e を囲む部分との間を介して圧側室 R 2 へ連通されている。

【 0 0 5 6 】

バルブケース 5 の図 4 中上側である圧側室側には、環状板を複数枚積層して構成されたケース側バルブ 2 0 が重ねられている。ケース側バルブ 2 0 は、内周を固定端として外周側の撓みが許容されている。ケース側バルブ 2 0 は、リザーバ室 R の圧力が圧側室 R 2 の圧力より高くなり、吸込ポート 5 e を介して作用するリザーバ室 R の圧力を受けて撓んで花卉型弁座 5 i から離座して開弁すると吸込ポート 5 e を開放してリザーバ室 R と圧側室 R 2 とを連通させる。反対に、ケース側バルブ 2 0 は、圧側室 R 2 の圧力がリザーバ室 R の圧力より高いと背面側から作用する圧側室 R 2 によって押しつけられて花卉型弁座 5 i に密着し吸込ポート 5 e を閉塞して圧側室 R 2 とリザーバ室 R との連通を遮断する。したがって、ケース側バルブ 2 0 は、花卉型弁座 5 i に離着座して吸込ポート 5 e を開閉するチェックバルブとして機能する。

【 0 0 5 7 】

他方、バルブケース 5 の図 4 中下側であるリザーバ室側には、バルブ V 2 が設けられている。バルブ V 2 は、環板状であってバルブケース 5 に積まれるとともに外周弁座 5 h に離着座して環状窓 5 f を開閉可能であって環状窓 5 f に臨む孔 3 0 a を有する第一弁体 3 0 と、環板状であってバルブケース 5 の内周弁座 5 g と第一弁体 3 0 との間に介装されて孔 3 0 a を開閉可能な第二弁体 3 1 と、第一弁体 3 0 の反弁座部材側に重ねられて孔 3 0 a に通じる絞りとしてのオリフィス 3 2 a を有する絞り弁体としてのオリフィス弁体 3 2 と、第一弁体 3 0 を第二弁体 3 1 側へ向けて付勢する付勢部材 B 2 とを備えている。

【 0 0 5 8 】

第一弁体 3 0 は、図 4 に示すように、前述の通り環板状であって、内周が固定端として外周側の撓みが許容され、外周弁座 5 h に離着座して減衰ポート 5 d を開閉するようになっており、バルブ V 2 の主弁体として機能している。また、本実施の形態では、図 3 に示すように、第一弁体 3 0 は、環状窓 5 f に対向する位置に周方向に沿って配置される複数の孔 3 0 a を備える他、外周に切欠で形成される複数の固定オリフィス 3 0 b を備えている。したがって、第一弁体 3 0 は、外周弁座 5 h に着座した状態では、固定オリフィス 3 0 b を介して減衰ポート 5 d とリザーバ室 R とを連通させる。

【 0 0 5 9 】

そして、第一弁体 3 0 のバルブケース側には、第二弁体 3 1 が配置されている。第二弁体 3 1 は、外径が外周弁座 5 h の内径よりも小径であって孔 3 0 a を開閉可能な径とされる環板状であって、内周弁座 5 g と第一弁体 3 0 との間に介装されている。また、第二弁体 3 1 は、内周が固定端として外周側の撓みが許容され、第一弁体 3 0 に離着して孔 3 0 a を開閉するようになっており、バルブ V 2 の副弁体として機能している。

【 0 0 6 0 】

また、本実施の形態の第一弁体 3 0 の反バルブケース側には、図 4 に示すように、オリフィス弁体 3 2 が設けられている。オリフィス弁体 3 2 は、外径が第一弁体 3 0 の外径と同径の環板状であって、内周が固定端とされて第一弁体 3 0 と共に外周の撓みが許容されている。また、オリフィス弁体 3 2 は、図 3 に示すように、同一円周上に配置される四つの円弧状孔 3 2 b と、外周から開口してそれぞれ対応する円弧状孔 3 2 b に通じる四つのオリフィス 3 2 a とを備えている。

【 0 0 6 1 】

なお、本実施の形態では、第一弁体 3 0 とオリフィス弁体 3 2 との間には、図 4 に示すように、外径が第一弁体 3 0 の外径と同径の環板状のディスク 3 3 が介装されている。ディスク 3 3 は、図 3 に示すように、内周が固定端とされて第一弁体 3 0 およびオリフィス

10

20

30

40

50

弁体 3 2 と共に外周の撓みが許容されており、第一弁体 3 0 の孔 3 0 a とオリフィス弁体 3 2 の円弧状孔 3 2 b と対向する C 型の切欠 3 3 a を備えている。よって、孔 3 0 a とオリフィス 3 2 a は、切欠 3 3 a および円弧状孔 3 2 b を介して連通されており、孔 3 0 a はオリフィス 3 2 a に通じる通路として機能している。そして、第二弁体 3 1 が孔 3 0 a を開放すると圧側室 R 2 とリザーバ室 R は、孔 3 0 a、切欠 3 3 a、円弧状孔 3 2 b およびオリフィス 3 2 a を通じて連通される。このように、ディスク 3 3 は、切欠 3 3 a を孔 3 0 a と円弧状孔 3 2 b とに対向させて両者を連通する役割を果たしており、第一弁体 3 0 とオリフィス弁体 3 2 の周方向相対的な位置によらず孔 3 0 a と円弧状孔 3 2 b の連通度合を大きくするために設けられている。第一弁体 3 0 の孔 3 0 a とオリフィス弁体 3 2 の円弧状孔 3 2 b との連通度合が或る程度確保できる場合、ディスク 3 3 は廃止してもよい。

10

【 0 0 6 2 】

付勢部材 B 2 は、第一弁体 3 0 の反バルブケース側に配置されており、オリフィス弁体 3 2 の反バルブケース側に積層されている。具体的には、付勢部材 B 2 は、第一弁体 3 0 の反バルブケース側に配置される弾性を有する環状板 3 4 と、環板状であって第一弁体 3 0 と環状板 3 4 との間に介装されるリング 3 5 とを備えている。

【 0 0 6 3 】

環状板 3 4 は、複数枚が積層されて設けられており、内周が固定端とされて外周側の撓みが許容されている。リング 3 5 は、内径が第一弁体 3 0 と環状板 3 4 の内径よりも大径であるとともに第一弁体 3 0 と環状板 3 4 の外径よりも小径とされており、本実施の形態

20

【 0 0 6 4 】

さらに、付勢部材 B 2 の環状板 3 4 の反バルブケース側には、環状であって環状板 3 4 の外径よりも外径が小径の間座 3 8 が重ねられている。そして、ケース側バルブ 2 0、バルブケース 5、第二弁体 3 1、第一弁体 3 0、ディスク 3 3、オリフィス弁体 3 2、リング 3 5 が取り付けられたリング保持環 3 6、スペーサ 3 7、三枚の環状板 3 4 および間座 3 8 がバルブケース 5 の内周に嵌合されるガイドロッド 2 1 の外周に順番に組み付けられるとともに、ガイドロッド 2 1 の先端に螺着されるナット 2 2 によってガイドロッド 2 1 に固定される。ケース側バルブ 2 0、第二弁体 3 1、第一弁体 3 0、ディスク 3 3、オリフィス弁体 3 2、リング保持環 3 6、スペーサ 3 7 および環状板 3 4 は、ナット 2 2 の螺着によって固定されると、内周が固定されて外周の撓みが許容された状態でガイドロッド 2 1 に固定される。

30

【 0 0 6 5 】

リング 3 5 とスペーサ 3 7 とでは横方向から見て高さが異なっているので、環状板 3 4 の外周が下方へ撓んでおり、環状板 3 4 に初期撓みが与えられている。このように初期撓みが与えられるので、環状板 3 4 は、第一弁体 3 0 をバルブケース側へ押しつける付勢力を発揮して第一弁体 3 0 を外周弁座 5 h へ着座させている。

40

【 0 0 6 6 】

つまり、付勢部材 B 2 は、本実施の形態では、環状板 3 4 の弾発力で第一弁体 3 0 を付勢している。そして、付勢部材 B 2 は、この付勢力によって第一弁体 3 0 が減衰ポート 5 d を介して作用する圧側室 R 2 の圧力を受けて外周弁座 5 h から離座する際の圧側室 R 2 とリザーバ室 R の差圧である開弁圧を設定している。開弁圧は、環状板 3 4 の設置枚数によって調節でき、本実施の形態では、三枚の環状板 3 4 を設けているが要求される開弁圧によって設置枚数は適宜変更できる。

50

【 0 0 6 7 】

そして、図 4 に示すように、バルブケース 5 を横方向から見て、内周弁座 5 g の方が外周弁座 5 h よりも高くなっているため、付勢部材 B 2 からの付勢力を受けた第一弁体 3 0 は外周が図 4 中上方なる第二弁体 3 1 側へ撓んだ状態で外周弁座 5 h に着座する。このように第一弁体 3 0 が第二弁体 3 1 側へ撓むのに対して、第二弁体 3 1 も第一弁体 3 0 に就いて環状窓 5 f 側へ向けて撓むので、第二弁体 3 1 が第一弁体 3 0 のバルブケース側面に密着して孔 3 0 a を閉塞する。このように、バルブ V 2 をバルブケース 5 とともにガイドロッド 2 1 に固定した状態で何ら圧力も流体力も作用しない無負荷状態において、第二弁体 3 1 が第一弁体 3 0 のバルブケース側面に密着して孔 3 0 a を確実に閉塞する。なお、本実施の形態では、横方向から見て外周弁座 5 h より内周弁座 5 g を高くしているが、内周弁座 5 g が外周弁座 5 h に対して低くても、第二弁体 3 1 の反弁座部材側面となる図 4 中下面が弁座部材としてのバルブケース 5 の外周弁座 5 h よりも高くなっていればよい。このようにすれば、第一弁体 3 0 の内周の固定位置は、外周弁座 5 h よりも高くなって、付勢部材 B 2 によって付勢されると図 4 中上方側となる外周弁座 5 h 側へ撓んで第二弁体 3 1 に密着する。なお、第二弁体 3 1 と内周弁座 5 g との間にスペーサを設けて、第二弁体 3 1 の反弁座部材側面となる図 4 中下面が弁座部材としてのバルブケース 5 の外周弁座 5 h よりも高くしてもよい。この場合も、第二弁体 3 1 は、第一弁体 3 0 が外周弁座 5 h に着座する状態では、第一弁体 3 0 とともに撓んで第一弁体 3 0 に密着して孔 3 0 a を閉塞できる。

【 0 0 6 8 】

このように構成されたバルブ V 2 は、圧側室 R 2 の圧力がリザーバ室 R の圧力より高くなっても両者の差圧が前記開弁圧に達するまでは第一弁体 3 0 が外周弁座 5 h に着座した状態に維持される。この状態では固定オリフィス 3 0 b を通じて圧側室 R 2 とリザーバ室 R とが連通されるので、圧側室 R 2 内の作動油は固定オリフィス 3 0 b のみを通してリザーバ室 R へ移動する。また、第二弁体 3 1 は、無負荷状態でも第一弁体 3 0 に密着しており、減衰ポート 5 d を介して圧側室 R 2 の圧力を受けるので第一弁体 3 0 に密着したままとなりオリフィス 3 2 a に通じる孔 3 0 a を閉塞する。よって、オリフィス弁体 3 2 のオリフィス 3 2 a には、作動油は流れずオリフィス 3 2 a は機能しない。

【 0 0 6 9 】

そして、バルブ V 2 は、圧側室 R 2 の圧力がリザーバ室 R の圧力より高くなって両者の差圧が前記開弁圧に達すると、第一弁体 3 0 を押す力が環状板 3 4 の付勢力に打ち勝って第一弁体 3 0 が撓んで外周弁座 5 h から離座し開弁する。バルブ V 2 が開弁すると減衰ポート 5 d が開放され、作動油は、第一弁体 3 0 と外周弁座 5 h との間にできる環状隙間を介して圧側室 R 2 からリザーバ室 R へ移動するようになる。なお、第二弁体 3 1 は、第一弁体 3 0 とともに圧側室 R 2 の圧力を受けて撓むので第一弁体 3 0 のバルブケース側面に密着した状態となり孔 3 0 a を閉塞してオリフィス 3 2 a を機能させない。

【 0 0 7 0 】

また、バルブ V 2 は、リザーバ室 R の圧力が圧側室 R 2 の圧力より高いと背面側から作用するリザーバ室 R によって押しつけられて第一弁体 3 0 が外周弁座 5 h に密着し減衰ポート 5 d を閉塞する。また、オリフィス 3 2 a、円弧状孔 3 2 b、切欠 3 3 a および孔 3 0 a を介してリザーバ室 R の圧力が第二弁体 3 1 に作用して第二弁体 3 1 が環状窓 5 f 側へ撓んで第一弁体 3 0 から離間して孔 3 0 a を開放する。よって、リザーバ室 R の圧力が圧側室 R 2 の圧力より高くなると、前述の固定オリフィス 3 0 b を介してリザーバ室 R と圧側室 R 2 とが連通されるほか、第二弁体 3 1 が孔 3 0 a を開放してオリフィス 3 2 a を介してもリザーバ室 R と圧側室 R 2 とが連通される。

【 0 0 7 1 】

このようにバルブ V 2 では、圧側室 R 2 の圧力がリザーバ室 R の圧力よりも高いがその差圧が小さい場合には、作動油に固定オリフィス 3 0 b を通過させ、リザーバ室 R の圧力が圧側室 R 2 の圧力よりも高いがその差圧が小さいと作動油に固定オリフィス 3 0 b およびオリフィス 3 2 a を通過させる。そして、このように構成されたバルブ V 2 では、無負

荷状態で第二弁体 3 1 が第一弁体 3 0 に密着して孔 3 0 a を確実に閉塞できるので圧側室 R 2 からリザーバ室 R へ作動油が向かう作動時において減衰特性が変化する不具合も解消され、オリフィス 3 2 a を確実に片効きのオリフィスとして機能させ得る。

【 0 0 7 2 】

なお、第一弁体 3 0 における孔 3 0 a をオリフィスとして機能させてもよく、その場合には、オリフィス弁体 3 2 の代わりに、オリフィス弁体 3 2 と同様の円弧状孔と外周から開口して円弧状孔に連通する切欠とを備えた環板状のディスクを設けて、オリフィス弁体 3 2 を廃止してもよい。また、弁座部材としてのバルブケース 5 の形状および構造は、前述したところに限定されるものではなく、適宜設計変更することができる。

【 0 0 7 3 】

バルブ V 1 , V 2 および緩衝器 D は、以上のように構成される。つづいて、緩衝器 D の作動について説明する。まず、緩衝器 D が伸長する場合について説明する。ピストン 2 がシリンダ 1 に対して図 1 中上方側へ移動して、緩衝器 D が伸長行程にある場合、伸側室 R 1 が圧縮されて、圧側室 R 2 が拡大される。ピストン 2 のシリンダ 1 に対する移動速度であるピストン速度が低速の場合、伸側室 R 1 の圧力が圧側室 R 2 の圧力より高くなるが、両者の差圧は第一弁体 1 0 の開弁圧に達しない。そのため、バルブ V 1 における第一弁体 1 0 が外周弁座 2 e に着座した状態に維持され、作動油は、固定オリフィス 1 0 b を通じて伸側室 R 1 から圧側室 R 2 へ移動する。よって、伸長行程時であってピストン速度が低速域にある場合、緩衝器 D は、図 5 に示すように、固定オリフィス 1 0 b によって減衰力を発揮し、オリフィス特有のピストン速度の二乗に比例するような特性の減衰力を発揮する。

【 0 0 7 4 】

また、緩衝器 D の伸長行程時には、ピストンロッド 3 がシリンダ 1 内から退出するので、このピストンロッド 3 がシリンダ 1 から退出する体積分の作動油がシリンダ 1 内で不足する。ピストン速度が低速の場合、リザーバ室 R と圧側室 R 2 の差圧が小さいためバルブケース 5 に設けたケース側バルブ 2 0 は開弁しないものの、バルブ V 2 の第二弁体 3 1 が撓んで孔 3 0 a を開放する。よって、シリンダ 1 内で不足する体積分の作動油は、固定オリフィス 3 0 b およびオリフィス 3 2 a を介してリザーバ室 R からシリンダ 1 内へ供給される。つまり、低いピストン速度で緩衝器 D が伸長する場合、固定オリフィス 3 0 b のみならずオリフィス 3 2 a も有効となる。

【 0 0 7 5 】

伸長行程の際のピストン速度が高速となると、伸側室 R 1 と圧側室 R 2 の差圧が大きくなり、両者の差圧が第一弁体 1 0 の開弁圧に達すると、第一弁体 1 0 を推す力が付勢部材 B 1 の付勢力に打ち勝って第一弁体 1 0 が撓んで外周弁座 2 e から離座して伸側ポート 2 a を開放する。すると、作動油は、第一弁体 1 0 と外周弁座 2 e との間に出現する環状隙間を通過して伸側室 R 1 から圧側室 R 2 へ移動する。また、リザーバ室 R と圧側室 R 2 の差圧が大きくなるので、バルブケース 5 に設けたケース側バルブ 2 0 が開弁して吸込ポート 5 e を開放する。よって、シリンダ 1 内で不足する分の作動油は、吸込ポート 5 e を通過してリザーバ室 R からシリンダ 1 内に供給されるようになる。よって、伸長行程時であってピストン速度が高速域にある場合、緩衝器 D は、図 5 に示すように、第一弁体 1 0 と付勢部材 B 1 によって減衰力を発揮し、ピストン速度に比例するような特性の減衰力を発揮する。

【 0 0 7 6 】

また、伸長行程時において、ピストン速度が低速域にある場合にはリザーバ室 R から圧側室 R 2 へ向かう作動油は、固定オリフィス 3 0 b とオリフィス 3 2 a の双方を通過できるので、第二弁体 3 1 の開弁によって流路面積を大きく確保できる。ピストン速度が高速域に達すると、ケース側バルブ 2 0 が開弁して吸込ポート 3 e を開放するが、ケース側バルブ 2 0 の開弁前後で流路面積の変化度合を小さくできるので、圧側室 R 2 内の圧力変動を抑制できる。

【 0 0 7 7 】

つづいて、緩衝器 D が収縮する場合について説明する。ピストン 2 がシリンダ 1 に対して図 1 中下方側へ移動して、緩衝器 D が収縮行程にある場合、圧側室 R 2 が圧縮されて、伸側室 R 1 が拡大される。ピストン速度が低速の場合、圧側室 R 2 の圧力が伸側室 R 1 の圧力より高くなるが両者の差圧は小さく、ピストン側バルブ 6 は開弁しないが、バルブ V 1 の第二弁体 1 1 が撓んで孔 1 0 a を開放する。よって、圧側室 R 2 から伸側室 R 1 へ向かう作動油は、固定オリフィス 1 0 b およびオリフィス 1 2 a を介して移動する。つまり、低いピストン速度で緩衝器 D が収縮する場合、固定オリフィス 1 0 b のみならずオリフィス 1 2 a も有効となる。

【 0 0 7 8 】

また、緩衝器 D の収縮行程時には、ピストンロッド 3 がシリンダ 1 内へ侵入するので、このピストンロッド 3 がシリンダ 1 へ侵入する体積分の作動油がシリンダ 1 内で過剰となる。ピストン速度が低速の場合、圧側室 R 2 とリザーバ室 R と差圧が小さいためバルブ V 2 における第一弁体 3 0 は開弁しないので、作動油は、固定オリフィス 3 0 b を介して圧側室 R 2 からリザーバ室 R へ移動する。よって、収縮行程時であってピストン速度が低速域にある場合、緩衝器 D は、図 5 に示すように、固定オリフィス 3 0 b によって減衰力を発揮し、オリフィス特有のピストン速度の二乗に比例するような特性の減衰力を発揮する。

【 0 0 7 9 】

収縮行程の際のピストン速度が高速となると、圧側室 R 2 とリザーバ室 R の差圧が大きくなり、両者の差圧が第一弁体 3 0 の開弁圧に達すると、第一弁体 3 0 を推す力が付勢部材 B 2 の付勢力に打ち勝って第一弁体 3 0 が撓んで外周弁座 5 h から離座して減衰ポート 5 d を開放する。すると、作動油は、第一弁体 3 0 と外周弁座 5 h との間に出現する環状隙間を通過して圧側室 R 2 からリザーバ室 R へ移動する。また、圧側室 R 2 と伸側室 R 1 の差圧が大きくなるので、ピストン 2 に設けたピストン側バルブ 6 が開弁して圧側ポート 2 b を開放する。よって、収縮行程時であってピストン速度が高速域にある場合、緩衝器 D は、図 5 に示すように、第一弁体 3 0 と付勢部材 B 2 によって減衰力を発揮し、ピストン速度に比例するような特性の減衰力を発揮する。

【 0 0 8 0 】

また、収縮行程時において、ピストン速度が低速域にある場合には圧側室 R 2 から伸側室 R 1 へ向かう作動油は、固定オリフィス 1 0 b とオリフィス 1 2 a の双方を通過できるので、第二弁体 1 1 の開弁によって流路面積を大きく確保できる。ピストン速度が高速域に達すると、ピストン側バルブ 6 が開弁して圧側ポート 2 b を開放するが、ピストン側バルブ 6 の開弁前後で流路面積の変化度合を小さくできるので、伸側室 R 1 内の圧力変動を抑制できる。

【 0 0 8 1 】

以上のように緩衝器 D は、シリンダ 1 と、シリンダ 1 内に移動自在に挿入されるとともにシリンダ 1 内を伸側室 R 1 と圧側室 R 2 とに区画するピストン 2 と、シリンダ 1 内に挿入されてピストン 2 に連結されるピストンロッド 3 と、シリンダ 1 を覆ってシリンダ 1 との間にリザーバ室 R を形成する外筒 4 と、シリンダ 1 の端部に設けられて圧側室 R 2 とリザーバ室 R とを仕切るバルブケース 5 と、ピストン 2 の伸側室 R 1 側に設けられてピストン 2 に設けられる圧側ポート 2 b を開閉するピストン側バルブ 6 と、バルブケース 5 の圧側室 R 2 側に設けられてバルブケース 5 に設けられる吸込ポート 5 e を開閉するケース側バルブ 2 0 と、ピストン 2 の圧側室 R 2 側に配置されるバルブ V 1 と、バルブケース 5 のリザーバ室 R 側に配置されるバルブ V 2 とを備えている。

【 0 0 8 2 】

このように構成された緩衝器 D では、伸長行程時におけるケース側バルブ 2 0 の開弁の前後で圧側室 R 2 の圧力変動を抑制でき、収縮行程時におけるピストン側バルブ 6 の開弁の前後で伸側室 R 1 の圧力変動を抑制できる。よって、このように構成された緩衝器 D によれば、無負荷状態でも絞りとしてのオリフィス 1 2 a , 3 2 a を確実に閉鎖でき、異音の発生を抑制できるとともに、車両のサスペンションに利用すると車両における乗り心地

10

20

30

40

50

を向上できる。

【 0 0 8 3 】

また、ピストン 2 の圧側室 R 2 側にバルブ V 1 を設けてバルブケース 5 にはバルブ V 2 の代わりにリーフバルブを設ける場合、緩衝器 D の収縮行程時において、ピストン側バルブ 6 の開弁の前後で伸側室 R 1 の圧力変動を抑制でき、異音の発生を防止できる。緩衝器 D の伸長行程時において異音発生の問題がないようであればこのようにピストン 2 の圧側室 R 2 側にのみバルブ V 1 を設けるようにしてもよい。さらに、バルブケース 5 のリザーバ室 R 側にバルブ V 2 を設けてピストン 2 にはバルブ V 1 の代わりにリーフバルブを設ける場合、緩衝器 D の伸長行程時において、ケース側バルブ 2 0 の開弁の前後で圧側室 R 2 の圧力変動を抑制でき、異音の発生を防止できる。緩衝器 D の収縮行程時において異音発生の問題がないようであればこのようにバルブケース 5 のリザーバ室 R 側にのみバルブ V 2 を設けるようにしてもよい。

10

【 0 0 8 4 】

そして、本発明のバルブ V 1 , V 2 は、ポート（伸側ポート 2 a、減衰ポート 5 d）と、ポート（伸側ポート 2 a、減衰ポート 5 d）の出口端に連通される環状窓 2 c , 5 f と、環状窓 2 c , 5 f の内周側に設けられた内周弁座 2 d , 5 g と、環状窓 2 c , 5 f の外周弁座 2 e , 5 h とを有する弁座部材 2 , 5 と、環板状であって弁座部材 2 , 5 に積まれるとともに外周弁座 2 e , 5 h に離着座して環状窓 2 c , 5 f を開閉可能であって環状窓 2 c , 5 f に臨んでオリフィス（絞り）或いはオリフィス（絞り）1 2 aに通じる通路となる孔 1 0 a , 3 0 a を有する第一弁体 1 0 , 3 0 と、環板状であって弁座部材 2 , 5 の内周弁座 2 d , 5 g と第一弁体 1 0 , 3 0 との間に介装されて孔 1 0 a , 3 0 a を開閉可能な第二弁体 1 1 , 3 1 と、第一弁体 1 0 , 3 0 を第二弁体 1 1 , 3 1 側へ向けて付勢する付勢部材 B 1 , B 2 とを備え、弁座部材 2 , 5 の軸方向に直交する方向から見て第二弁体 1 1 , 3 1 の反弁座部材側面を弁座部材の外周弁座よりも高くしている。

20

【 0 0 8 5 】

このように構成されたバルブ V 1 , V 2 では、無負荷状態で第二弁体 1 1 , 3 1 が第一弁体 1 0 , 3 0 に密着して孔 1 0 a , 3 0 a を閉塞できる。よって、本発明のバルブ V 1 , V 2 によれば、無負荷状態でも孔を確実に閉鎖でき、減衰特性が変化する不具合が解消され、オリフィス（絞り）1 2 a , 3 2 a を確実に片効きのオリフィス（絞り）として機能させ得る。

30

【 0 0 8 6 】

また、このように構成されたバルブ V 1 , V 2 を緩衝器 D に適用すれば、オリフィス（絞り）1 2 a , 3 2 a を緩衝器 D の伸長行程時にのみ或いは収縮行程時にのみ機能する片効きのオリフィス（絞り）に設定できるので、緩衝器 D の伸縮行程時の減衰力特性と収縮行程時の減衰力特性を独立して設定できる。

【 0 0 8 7 】

さらに、本実施の形態のバルブ V 1 , V 2 における付勢部材 B 1 , B 2 は、第一弁体 1 0 , 3 0 の反弁座部材側に配置される弾性を有する環状板 1 4 , 3 4 と、環板状であって第一弁体 1 0 , 3 0 と環状板 1 4 , 3 4 との間に介装され内径が第一弁体 1 0 , 3 0 と環状板 1 4 , 3 4 の内径よりも大径であるとともに第一弁体 1 0 , 3 0 と環状板 1 4 , 3 4 の外径よりも小径なリング 1 5 , 3 5 とを有している。このように構成されたバルブ V 1 , V 2 は、付勢部材 B 1 , B 2 の構造が簡素で軸方向長さも短くて済むので、緩衝器 D に適用しても緩衝器 D のストローク長を損なわないので、緩衝器 D の全長の長尺化も回避できる。

40

【 0 0 8 8 】

なお、付勢部材 B 1 は、図 6 に示すように、弾性体 4 0 で構成されてもよく、図示したところでは、オリフィス弁体 1 2 の円弧状孔 1 2 b がオリフィス 1 2 a を介さずに圧側室 R 2 に連通してしまわないようにオリフィス弁体 1 2 と同径のディスク 4 1 を重ねて、弾性体 4 0 をピストンロッド 3 の先端に固定したストッパ 4 2 とディスク 4 1 との間に圧縮状態で介装すればよい。弾性体 4 0 は、たとえば、コイルばね、皿ばね等のばねやゴム等

50

とされればよい。また、この構成を採用する場合、第二弁体 11、第一弁体 10、ディスク 13、オリフィス弁体 12 およびディスク 41 がピストンロッド 3 に対して軸方向移動可能としておき、弾性体 40 の収縮によってこれらが一体となって弁座部材としてのピストン 2 から離間する構造も採用できる。図 6 に示したバルブ V1 における付勢部材 B1 の構成は、バルブケース 5 に設けられたバルブ V2 にも適用可能である。

【0089】

また、本実施の形態のバルブ V1、V2 では、環板状であって第一弁体 10、30 の反弁座部材側に重ねられて孔 10a、30a に通じるオリフィス（絞り）12a、32a を有するオリフィス弁体（絞り弁体）12、32 を備えている。このように構成されたバルブ V1、V2 によれば、オリフィス弁体（絞り弁体）12、32 を備えているので、第一弁体 10、30 とオリフィス弁体 12、32 の周方向の相対位置によらず、オリフィス（絞り）12a、32a の開口面積を一定とできる。孔 10a、30a をオリフィス（絞り）として利用してもよいが、孔 10a、30a と孔 10a、30a を圧側室 R2 或いはリザーバ室 R へ連通するための切欠 13a、33a との連通度合は、第一弁体 10、30 とディスク 13、33 との周方向での相対位置により変化する。そのため、孔 10a、30a をオリフィス（絞り）とする場合には、第一弁体 10、30 とディスク 13、33 の組立の際に周方向での位置決めが必須となるが、オリフィス弁体（絞り弁体）12、32 を設けるとオリフィス（絞り）12a、32a の開口面積は変化しないので、組立作業が容易となり、常に一定の開口面積のオリフィス（絞り）12a、32a で減衰力発揮できる。

【0090】

なお、前述した実施形態では、絞りをオリフィスとしているが、絞りは、オリフィス以外にもチョークとされてもよい。この場合、オリフィス 12a、32a に代えてチョークを備えた絞り弁体をオリフィス弁体 12、32 の代わりに設ければよい。

【0091】

また、本実施の形態のバルブ V1、V2 では、固定オリフィス 10b、30b が設けられているので、バルブ V1、V2 のみで緩衝器 D の伸縮両側の減衰力特性を独立に設定可能である。なお、本実施の形態では、固定オリフィス 10b、30b を第一弁体 10、30 の外周に設けた切欠によって設置されているが、外周弁座 2e、5h に環状窓 2c、5f を圧側室 R2 或いはリザーバ室 R に連通する凹部を設けて、この凹部を固定オリフィスとしてもよい。

【0092】

なお、本実施の形態では、ピストン 2 の圧側室 R2 側にバルブ V1 を設けているが、ピストン 2 の伸側室 R1 側にバルブ V1 を設けてもよいし、バルブケース 5 のリザーバ室 R 側にバルブ V2 を設けているが、バルブケース 5 の圧側室 R2 側にバルブ V2 を設けてもよい。緩衝器の構造によらず、バルブ V1、V2 は、無負荷状態でもオリフィスを確実に閉鎖でき、減衰特性が変化する不具合を解消できるという利点は失われない。

【0093】

また、バルブ V1、V2 は、図 7 に示すように、減衰力を可変にできるユニフロー型の緩衝器 D1 への適用も可能である。この緩衝器 D1 は、緩衝器 D の構成に加えて、シリンダ 1 と外筒 4 との間に中間筒 50 を備えており、シリンダ 1 に設けた孔 1a を介してシリンダ 1 と中間筒 50 との間の環状隙間が伸側室 R1 に連通されている。さらに、緩衝器 D1 は、外筒 4 の下方の側部に可変減衰バルブ VV を備えたバルブブロック VB を備えている。バルブブロック VB は、中間筒 50 と外筒 4 との間の環状隙間で形成されるリザーバ室 R と前記環状隙間とを可変減衰バルブ VV を介して連通している。よって、この緩衝器 D1 では、シリンダ 1 と中間筒 50 との間の環状隙間とこの環状隙間をリザーバ室 R へ連通するバルブブロック VB 内に設けられる通路 52 とで減衰通路 P を構成している。

【0094】

可変減衰バルブ VV は、通路 52 に設けられており、伸側室 R1 からリザーバ室 R へ向かう作動油の流れのみを許容するとともに減衰通路 P を通過する作動油の流れに抵抗を与

える。

【 0 0 9 5 】

可変減衰バルブ V V は、ソレノイドを備えた電磁弁とされており、伸側室 R 1 からリザーバ室 R へ向かって減衰通路 P を流れる作動油に抵抗を与えられるとともに、ソレノイドへ与える電流によって開弁圧を調節できるようになっている。このように構成される可変減衰バルブ V V は、ソレノイドへの通電量に応じて開弁圧を調整する圧力制御弁として機能し、緩衝器が発生する減衰力を調節できる。なお、可変減衰バルブ V V は、開弁圧の調整によって減衰力を可変にする減衰バルブ以外にも減衰力の調整が可能であれば任意構成の減衰バルブを利用できる。

【 0 0 9 6 】

つづいて、このように構成された緩衝器 D 1 の作動について説明する。まず、緩衝器 D 1 が伸長する場合について説明する。ピストン 2 がシリンダ 1 に対して図 7 中上方側へ移動して、緩衝器 D 1 が伸長行程にある場合、伸側室 R 1 が圧縮されて、圧側室 R 2 が拡大される。ピストン 2 のシリンダ 1 に対する移動速度であるピストン速度が低速の場合、伸側室 R 1 の圧力が圧側室 R 2 の圧力より高くなるが、両者の差圧は第一弁体 1 0 の開弁圧に達しない。そのため、バルブ V 1 における第一弁体 1 0 が外周弁座 2 e に着座した状態に維持される。可変減衰バルブ V V の開弁圧を低くすれば、可変減衰バルブ V V が開弁して伸側室 R 1 から減衰通路 P を通じてリザーバ室 R へ作動油が移動する。また、可変減衰バルブ V V の開弁圧を高くすれば、可変減衰バルブ V V が閉弁したままとなるので、作動油は、固定オリフィス 1 0 b を通じて伸側室 R 1 から圧側室 R 2 へ移動する。

【 0 0 9 7 】

よって、伸長行程時であってピストン速度が低速域にある場合、緩衝器 D は、図 8 に示すように、可変減衰バルブ V V の調整により、可変減衰バルブ V V の開弁圧を最小する際の減衰力（図 8 中一点鎖線）から固定オリフィス 1 0 b のみによって発生される減衰力（図 8 中実線）までの範囲で減衰力を調整できる。

【 0 0 9 8 】

また、緩衝器 D 1 の伸長行程時には、ピストンロッド 3 がシリンダ 1 内から退出するので、このピストンロッド 3 がシリンダ 1 から退出する体積分の作動油がシリンダ 1 内で不足する。ピストン速度が低速の場合、リザーバ室 R と圧側室 R 2 の差圧が小さいためバルブケース 5 に設けたケース側バルブ 2 0 は開弁しないが、バルブ V 2 の第二弁体 3 1 が撓んで孔 3 0 a を開放する。よって、シリンダ 1 内で不足する体積分の作動油は、固定オリフィス 3 0 b およびオリフィス 3 2 a を介してリザーバ室 R からシリンダ 1 内へ供給される。つまり、低いピストン速度で緩衝器 D が伸長する場合、固定オリフィス 3 0 b のみならずオリフィス 3 2 a も有効となる。

【 0 0 9 9 】

伸長行程の際のピストン速度が高速となると、伸側室 R 1 と圧側室 R 2 の差圧が大きくなる。伸側室 R 1 と圧側室 R 2 の差圧が第一弁体 1 0 の開弁圧に達するまでは、可変減衰バルブ V V の開弁圧の調整によって伸側室 R 1 内の圧力を制御できる。伸側室 R 1 と圧側室 R 2 の差圧が第一弁体 1 0 の開弁圧に達すると、第一弁体 1 0 を推す力が付勢部材 B 1 の付勢力に打ち勝って第一弁体 1 0 が撓んで外周弁座 2 e から離座して伸側ポート 2 a を開放する。すると、作動油は、第一弁体 1 0 と外周弁座 2 e との間に出現する環状隙間を通過して伸側室 R 1 から圧側室 R 2 へ移動するようになる。また、リザーバ室 R と圧側室 R 2 の差圧が大きくなるので、バルブケース 5 に設けたケース側バルブ 2 0 が開弁して吸込ポート 5 e を開放する。よって、シリンダ 1 内で不足する分の作動油は、吸込ポート 5 e を通過してリザーバ室 R からシリンダ 1 内に供給されるようになる。

【 0 1 0 0 】

よって、伸長行程時であってピストン速度が高速域にある場合、緩衝器 D 1 は、図 7 に示すように、可変減衰バルブ V V の調整により、可変減衰バルブ V V の開弁圧を最小する際の減衰力（図 8 中一点鎖線）から第一弁体 1 0 によって発生される減衰力（図 8 中実線）までの範囲で減衰力を調整できる。このように緩衝器 D 1 に適用されたバルブ V 1 にお

10

20

30

40

50

ける第一弁体 10 は、伸長行程時の最大減衰力を決するリリーフバルブとして機能する。

【0101】

また、伸長行程時において、ピストン速度が低速域にある場合にはリザーバ室 R から圧側室 R2 へ向かう作動油は、固定オリフィス 30b とオリフィス 32a の双方を通過できるので、第二弁体 31 の開弁によって流路面積を大きく確保できる。ピストン速度が高速域に達すると、ケース側バルブ 20 が開弁して吸込ポート 3e を開放するが、ケース側バルブ 20 の開弁前後で流路面積の変化度合を小さくできるので、圧側室 R2 内の圧力変動を抑制できる。

【0102】

つづいて、緩衝器 D1 が収縮する場合について説明する。ピストン 2 がシリンダ 1 に対して図 1 中下方側へ移動して、緩衝器 D1 が収縮行程にある場合、圧側室 R2 が圧縮されて、伸側室 R1 が拡大される。ピストン速度が低速の場合、圧側室 R2 の圧力が伸側室 R1 の圧力より高くなる。圧側室 R2 と伸側室 R1 の差圧は小さいためピストン側バルブ 6 は開弁しないが、バルブ V1 の第二弁体 11 が撓んで孔 10a を開放する。よって、圧側室 R2 から伸側室 R1 へ向かう作動油は、固定オリフィス 10b およびオリフィス 12a を介して移動する。つまり、低いピストン速度で緩衝器 D1 が収縮する場合、固定オリフィス 10b のみならずオリフィス 12a も有効となる。

【0103】

また、緩衝器 D の収縮行程時には、ピストンロッド 3 がシリンダ 1 内へ侵入するので、このピストンロッド 3 がシリンダ 1 へ侵入する体積分の作動油がシリンダ 1 内で過剰となる。ピストン速度が低速の場合、圧側室 R2 とリザーバ室 R と差圧が小さいためバルブ V2 における第一弁体 30 は開弁しない。可変減衰バルブ VV の開弁圧を低くすれば、可変減衰バルブ VV が開弁して伸側室 R1 から減衰通路 P を通じてリザーバ室 R へ作動油が移動する。また、可変減衰バルブ VV の開弁圧を高くすれば、可変減衰バルブ VV が閉弁したままとなるので、作動油は、固定オリフィス 30b を通じて圧側室 R2 からリザーバ室 R へ移動する。

【0104】

よって、収縮行程時であってピストン速度が低速域にある場合、緩衝器 D1 は、図 7 に示すように、可変減衰バルブ VV の調整により、可変減衰バルブ VV の開弁圧を最小する際の減衰力（図 8 中一点鎖線）から固定オリフィス 30b のみによって発生される減衰力（図 8 中実線）までの範囲で減衰力を調整できる。

【0105】

収縮行程の際のピストン速度が高速となると、圧側室 R2 とリザーバ室 R の差圧が大きくなる。この状況となると圧側室 R2 と伸側室 R1 の差圧が大きくなるので、ピストン 2 に設けたピストン側バルブ 6 が開弁して圧側ポート 2b を開放するので、圧側室 R2 と伸側室 R1 の差圧がピストン側バルブ 6 の開弁圧に程度に維持される。そして、圧側室 R2 とリザーバ室 R の差圧が第一弁体 30 の開弁圧に達するまでは、可変減衰バルブ VV の開弁圧の調整によってシリンダ 1 内の圧力を制御できる。また、圧側室 R2 とリザーバ室 R の差圧が第一弁体 30 の開弁圧に達すると、第一弁体 30 を推す力が付勢部材 B2 の付勢力に打ち勝って第一弁体 30 が撓んで外周弁座 5h から離座して減衰ポート 5d を開放する。すると、作動油は、第一弁体 30 と外周弁座 5h との間に出現する環状隙間を通過して圧側室 R2 からリザーバ室 R へ移動するようになる。

【0106】

よって、収縮行程時であってピストン速度が高速域にある場合、緩衝器 D1 は、図 7 に示すように、可変減衰バルブ VV の調整により、可変減衰バルブ VV の開弁圧を最小する際の減衰力（図 8 中一点鎖線）から第一弁体 30 によって発生される減衰力（図 8 中実線）までの範囲で減衰力を調整できる。このように緩衝器 D1 に適用されたバルブ V2 における第一弁体 30 は、収縮行程時の最大減衰力を決するリリーフバルブとして機能する。

【0107】

また、収縮行程時において、ピストン速度が低速域にある場合には圧側室 R2 から伸側

10

20

30

40

50

室 R 1 へ向かう作動油は、固定オリフィス 1 0 b とオリフィス 1 2 a の双方を通過できるので、第二弁体 1 1 の開弁によって流路面積を大きく確保できる。ピストン速度が高速域に達すると、ピストン側バルブ 6 が開弁して圧側ポート 2 b を開放するが、ピストン側バルブ 6 の開弁前後で流路面積の変化度合を小さくできるので、伸側室 R 1 内の圧力変動を抑制できる。

【 0 1 0 8 】

前述したところから理解できるように、緩衝器 D 1 は、基本的には、伸長しても収縮してもシリンダ 1 内から作動油が可変減衰バルブ V V を通じてリザーバ室 R へ流れるユニフロー型の緩衝器として振る舞う。また、伸側室 R 1 内の圧力が過剰となると第一弁体 1 0 がリリーフバルブとして機能し、圧側室 R 2 内の圧力が過剰となると第一弁体 3 0 がリリーフバルブとして機能するようになっている。

10

【 0 1 0 9 】

以上のように緩衝器 D 1 は、シリンダ 1 と、シリンダ 1 内に移動自在に挿入されるとともにシリンダ 1 内を伸側室 R 1 と圧側室 R 2 とに区画するピストン 2 と、シリンダ 1 内に挿入されてピストン 2 に連結されるピストンロッド 3 と、シリンダ 1 の外周に配置されて内方にリザーバ室 R が形成される外筒 4 と、シリンダ 1 の端部に設けられて圧側室 R 2 とリザーバ室 R とを仕切るバルブケース 5 と、ピストン 2 の伸側室 R 1 側に設けられてピストン 2 に設けられる圧側ポート 2 b を開閉するピストン側バルブ 6 と、バルブケース 5 の圧側室 R 2 側に設けられてバルブケース 5 に設けられる吸込ポート 5 e を開閉するケース側バルブ 2 0 と、伸側室 R 1 とリザーバ室 R とを連通する減衰通路 P と、減衰通路 P に設けられて伸側室 R 1 からリザーバ室 R へ向かう流体の流れに抵抗を与える可変減衰バルブ V V と、ピストン 2 の圧側室 R 2 側に配置されるバルブ V 1 と、バルブケース 5 のリザーバ室 R 側に配置されるバルブ V 2 とを備えている。

20

【 0 1 1 0 】

このように構成された緩衝器 D 1 では、伸長行程時におけるケース側バルブ 2 0 の開弁の前後で圧側室 R 2 の圧力変動を抑制でき、収縮行程時におけるピストン側バルブ 6 の開弁の前後で伸側室 R 1 の圧力変動を抑制できる。よって、このように構成された緩衝器 D 1 によれば、無負荷状態でもオリフィス 1 2 a , 3 2 a を確実に閉鎖でき、異音の発生を抑制できるとともに、車両のサスペンションに利用すると車両における乗り心地を向上できる。

30

【 0 1 1 1 】

また、伸長行程の際にピストン速度が低速域にある場合、可変減衰バルブ V V によって調整可能な減衰力幅は、前述したとおり、可変減衰バルブ V V の開弁圧を最小する際の減衰力から固定オリフィス 1 0 b のみによって発生される減衰力までの範囲となる。よって、伸長行程の際の減衰力可変幅を大きくしたい場合は、固定オリフィス 1 0 b の流路面積を小さくして発生減衰力が大きくすればよい。このように固定オリフィス 1 0 b の流路面積を小さくして減衰力可変幅を大きくしても、収縮行程の際には、第二弁体 1 1 が孔 1 0 a を開放してオリフィス 1 2 a を有効とするので、収縮行程時における異音の発生が抑制される。

【 0 1 1 2 】

40

さらに、収縮行程の際にピストン速度が低速域にある場合、可変減衰バルブ V V によって調整可能な減衰力幅は、前述したとおり、可変減衰バルブ V V の開弁圧を最小する際の減衰力から固定オリフィス 3 0 b のみによって発生される減衰力までの範囲となる。よって、収縮行程の際の減衰力可変幅を大きくしたい場合は、固定オリフィス 3 0 b の流路面積を小さくして発生減衰力が大きくすればよい。このように固定オリフィス 3 0 b の流路面積を小さくして減衰力可変幅を大きくしても、伸長行程の際には、第二弁体 3 1 が孔 3 0 a を開放してオリフィス 3 2 a を有効とするので、伸長行程時における異音の発生が抑制される。

【 0 1 1 3 】

このように、緩衝器 D 1 のピストン 2 の圧側室 R 2 側にバルブ V 1 を設けて、バルブケ

50

ース 5 のリザーバ室 R 側にバルブ V 2 を設けると、緩衝器 D 1 の減衰力調整幅を大きくしつつも異音発生を抑制できるようになる。

【 0 1 1 4 】

また、ピストン 2 の圧側室 R 2 側にバルブ V 1 を設けてバルブケース 5 にはバルブ V 2 の代わりにリーフバルブを設ける場合、緩衝器 D 1 の伸長行程時における減衰力可変幅を大きくしつつ、収縮行程時においてピストン側バルブ 6 の開弁の前後で伸側室 R 1 の圧力変動を抑制でき、異音の発生を防止できる。緩衝器 D 1 の伸長行程時において異音発生の問題がないようであればこのようにピストン 2 の圧側室 R 2 側にのみバルブ V 1 を設けるようにしてもよい。

【 0 1 1 5 】

10

さらに、バルブケース 5 のリザーバ室 R 側にバルブ V 2 を設けてピストン 2 にはバルブ V 1 の代わりにリーフバルブ或いは可変減衰バルブを設ける場合、緩衝器 D の収縮行程時における減衰力可変幅を大きくしつつ、伸長行程時において、ケース側バルブ 2 0 の開弁の前後で圧側室 R 2 の圧力変動を抑制でき、異音の発生を防止できる。緩衝器 D の収縮行程時において異音発生の問題がないようであればこのようにバルブケース 5 のリザーバ室 R 側にのみバルブ V 2 を設けるようにしてもよい。

【 0 1 1 6 】

なお、前述したところでは、複筒型の緩衝器を例に本発明を説明したが、バルブ V 1 は、単筒型緩衝器のピストンに適用してもよく、この場合、バルブ V 1 をピストンの伸側室側と圧側室の一方または両方に設けてもよい。

20

【 0 1 1 7 】

以上、本発明の好ましい実施の形態を詳細に説明したが、特許請求の範囲から逸脱しない限り、改造、変形、および変更が可能である。

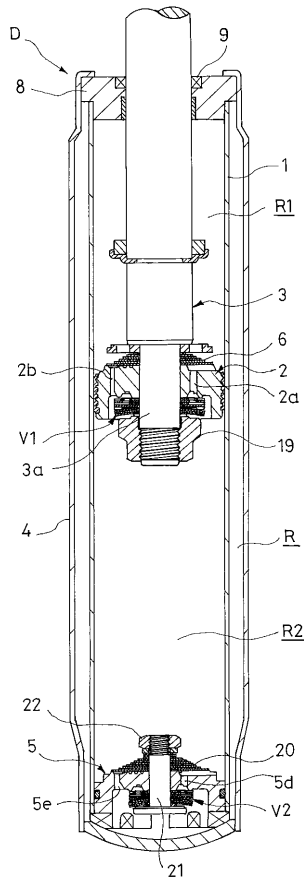
【 符号の説明 】

【 0 1 1 8 】

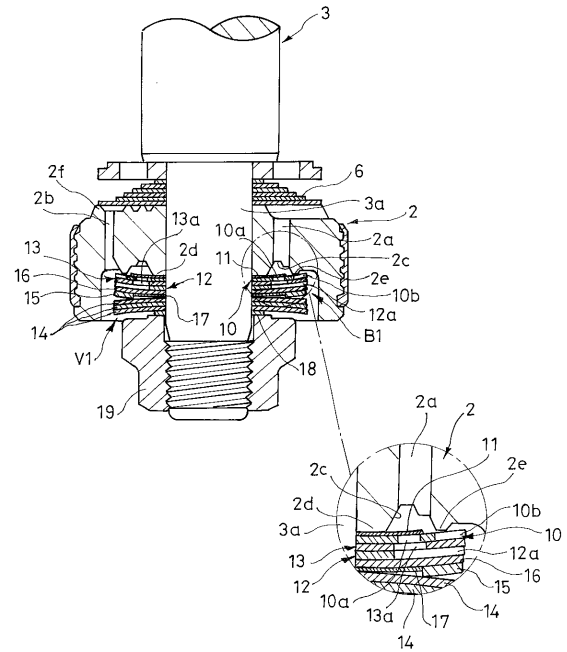
1・・・シリンダ、2・・・ピストン（弁座部材）、2 a・・・伸側ポート（ポート）、2 c, 5 f・・・環状窓、2 d, 5 f・・・内周弁座、2 e, 5 g・・・外周弁座、3・・・ピストンロッド、4・・・外筒、5・・・バルブケース（弁座部材）、5 d・・・減衰ポート（ポート）、6・・・ピストン側バルブ、1 0, 3 0・・・第一弁体、1 0 a, 3 0 a・・・孔、1 0 b, 3 0 b・・・固定オリフィス、1 1, 3 1・・・第二弁体、1 2, 3 2・・・オリフィス弁体（絞り弁体）、1 2 a, 3 2 a・・・オリフィス（絞り）、1 4, 3 4・・・環状板、1 5, 3 5・・・リング、2 0・・・ケース側バルブ、4 0・・・弾性体、B 1, B 2・・・付勢部材、P・・・減衰通路、R・・・リザーバ室 R・・・伸側室、R 2・・・圧側室、V 1, V 2・・・バルブ、V V・・・可変減衰バルブ

30

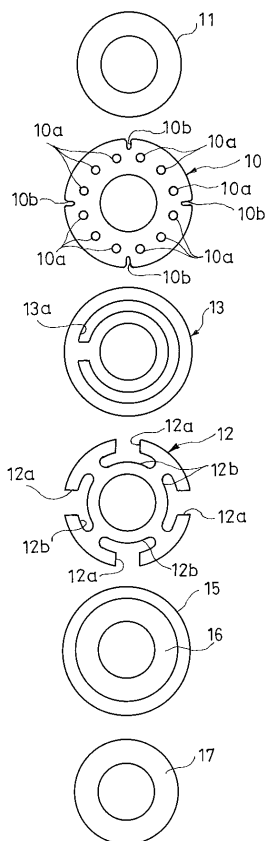
【図 1】



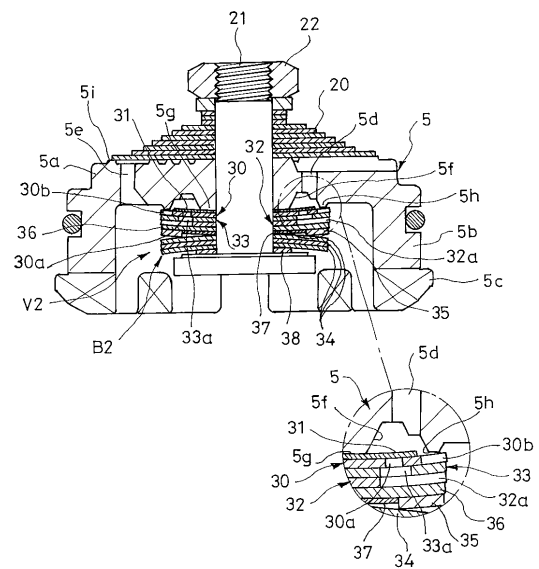
【図 2】



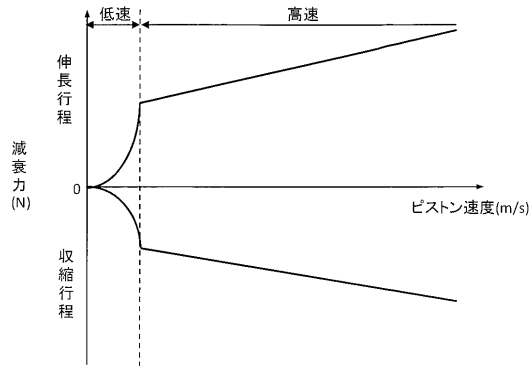
【図 3】



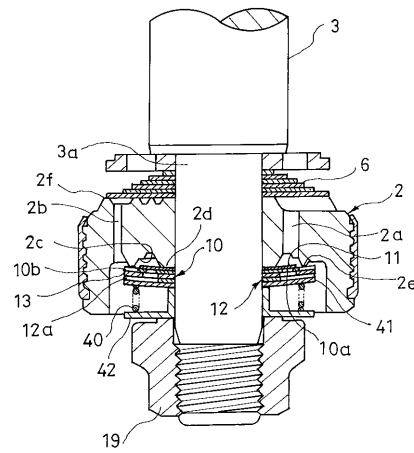
【図 4】



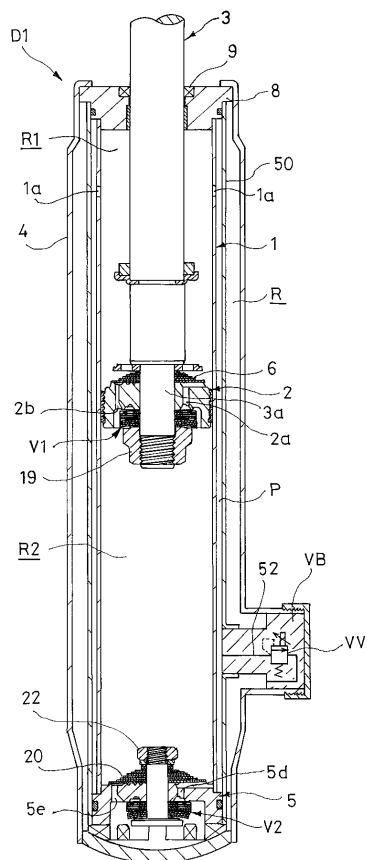
【図 5】



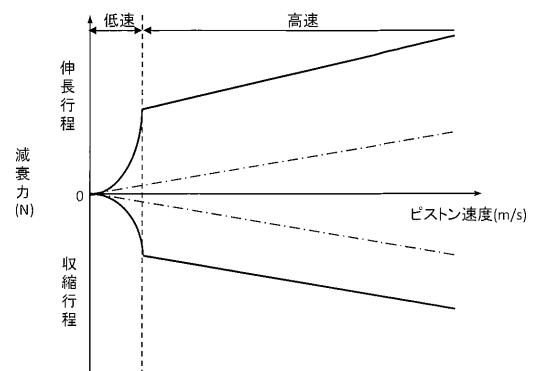
【図 6】



【図 7】



【図 8】



フロントページの続き

(72)発明者 古田 雄亮

東京都港区浜松町二丁目4番1号 世界貿易センタービル K Y B株式会社内

審査官 大谷 謙仁

(56)参考文献 実開昭62-149644(JP, U)

特開2006-194336(JP, A)

特開2015-86966(JP, A)

特開平9-42357(JP, A)

特開2016-75332(JP, A)

(58)調査した分野(Int.Cl., DB名)

F16F 9/348

F16F 9/32

F16F 9/46